

2024（令和6）年度

相模原看護専門学校 一般入学試験

**国語**

（試験時間 50 分 配点 100 点）

**注意事項**

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答する途中で、ページの落丁・乱丁や印刷不鮮明の箇所および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験官に知らせてください。
3. HBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムで完全に消してからマークしてください。
4. 氏名を記入し、番号欄を正しくマークしてください。
5. 試験終了の合図と同時に解答を止め、鉛筆を置いてください。
6. 解答用紙は試験官の指示に従って提出してください。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十年ばかり前、オーストラリア国立大学の日本語科に招かれて教師のまねごとをしていたことがあるが、そのとき学生諸君のなかに宮沢賢治の愛読者が大勢いるのを知ってとてもうれしかったのをおぼえている。

さっそく **A** 積をつければ、彼等は自分たちの **B** 力で賢治を発見したのではなかった。現在は日本に **C** を定め、作家活動をしているロジャー・パールバースさんがそのころ日本語科の助教で、じつはこの人が賢治のすぐれた読み **D** だったのである。

つまり賢治は、はじめは教材として学生諸君に与えられたのである。しかし賢治はすぐさま外国の若者たちの心をとらえた。それもじつにしっかりと。なにしろ、「賢治はわたしの新しい聖書です」と、きっぱりいう学生が何人もいたぐらいだから、これはナミタイテイな読まれ方ではない。いうまでもなく日本の若者のあいだでも賢治は熱っぽく読みつがれている。

<sup>1</sup> ではなぜ賢治はこれほど若者に愛読されているのだろうか。いや、「若者」という枠を <sup>a</sup> モウけて語るのは不正直というものだ。筆者のような中年おやじにも筑摩書房の全集を枕許に並べてからでないとなんだかカナシク寝つくことのできない夜があるのだから。

なによりもまず賢治は一個の宗教者だった。それも宗教イデオロギーを独善的に振りかざすたぐいの分からず屋ではない。また手前勝手に超越者をつくり上げて、その超越者にしたがわない人間はみんな <sup>b</sup> グ者、ときめつけてかかるような不寛容でコワモテの宗教家でもない。むしろ宗教業者でもない。賢治は <sup>2</sup> そういった宗教家たちのはるか彼方にいる。宇宙の生命と交わり、そこにいる。永遠とかさなるところにいる。

生化学者のオパーリンは「生物と無生物とのあいだにはまったく基本的差異はない」といったが、賢治が立っているところはまさにそのあたり、だから彼は作品のなかで銀河だの星だの秋の山だのシグナルだのと語り合ったり、親しい感情を交換し合ったりすることができるのである。賢治は、宇宙のすべてのものと交信可能な、個という制約をかるがる飛びこえた、そのような宗教者だった。

同時に賢治は科学者でもあった。これまた「科学こそ世界を救う」と言い立てて二十世紀のキリストを気取るようなアツカマシサは爪の垢ほどもない。<sup>3</sup> 専門という名のタコツボに立て籠って自分の研究成果がどう悪用されようと知ったことではないと

澄ましているような無責任さとも無縁である。まして企業家に仕えるタイコモチ科学者ではない。

熱力学第二法則（エントロピーの法則）だけが唯一たしかだと信じていたことからわかるように、賢治は科学の進歩の限界を察知していた。べつにいえば彼は顕微鏡の下の世界から天体望遠鏡のかなたの世界までを、いかにもまっとうな科学者らしく冷静にひとまとめにして眺めていたのである。

しかも彼の場合、宗教者賢治と科学者賢治とが <sup>4</sup> たがいにツノを突き合わせ足をひっぱり合つて泥仕合、というふうにはならなかった。それどころか靈感を科学的文脈で鍛えてだれもがわかるものにし、科学お得意の冷えた分析的な見方を天啓で熱くした。そこに稔ったのが彼の作品群である。

彼の作品では例外なく、なんだか奇妙に熱い飛躍と、なんともいえない奇体な冷静さとが同居しており、この相反するものが二本の柱となつて、ある構造をつくる。すなわち極端にちがうものが柱となつて両極となるのだから、その構造はほとんど全宇宙を <sup>c</sup> オオつてしまうほど巨大である。こんな力業ができるのも詩人のなかで宗教と科学とがたがいにたえず練磨し合っているからこそだろう。

詩人をはじめとして小説家や劇作家の運命はたいていきまっている。ほとんどがその死によつて忘却がはじまるのである。賢治はその例外のひとつで、ときがたつにつれて読者がふえてゆく。がしかしその理由はこれまで書いたところでもあきらかだらう。

かつて宗教が人間に幸福をもたらすとさかんに信じられていた時代があつた。むろん現代でも宗教を頼みの杖に世間という <sup>5</sup> 涙の谷をどうにかこうにか渡り切つてどこかにあるらしいやさらぎの園へたどりつきたいとねがう人は多い。だが人びとは、独善的で、不寛容で、どこか業者風な宗教に疑いの念を抱きはじめた。若い人たちは宇宙まで <sup>d</sup> 勘ジョウに入れていから、とりわけこの傾向がつよい。相当しつかりした地球論や宇宙論の用意がないと若い人たちはついてこない。そこで若い人たちは、宇宙の生命と交わるところにいる賢治を愛読するのである。

この数百年、人びとは科学に期待をかけてきた。科学こそが人間に幸福を贈ってくれるだろうと信じていたのである。そしてごく最近までその信仰はみごとにむくわれてきていた。

ところが現在ではどうか。科学とはひよつとしたら <sup>6</sup> 地球規模の土木工事技術の別名ではなかったか、と考える人がすくな

くない。地球で生きる時間を余計に残している者ほど、つまり若ければ若いほど、そのように考えている。科学の<sup>e</sup>シ数関数的な発達がやがて地球をこわすのではないかと直観して、その地球の上で生を営む人間というもののあわれさを見つめる心を持った賢治に、若い人たちが信頼を寄せるのは、だからアタリマエなのである。

もつとも賢治は<sup>7</sup>人間の営みのあわれさを乗りこえる手段をいくつか読者にのこしてくれたように筆者には思われる。紙幅に限りがあるので一っだけ書いておくと、たとえば法華経による世界認識がそれで、一滴の水、一輪の花、一本の樹木のうちに全宇宙がそっくり写しとられている、と賢治は作品のいたるところでささやいてくれる。

とすれば筆者の、さして上等とは思われぬこの身体も全宇宙の写しであるにちがいない。それなら、たとえ何歳で死のうと、全宇宙と同じだけ永く生きたということになる。ゴージャな話じゃないか、それならまあ死んでもしかたがないな――、そう思うと、どこかで大鎌をとぎながらこつちの隙をうかがっているにちがいない死神がさほどおそろしくなくなってくる。だからなんだかカナシイ夜は枕許に「賢治全集」を並べておくのである。

(井上ひさし『遅れたものが勝ちになる』より)

問一 傍線 a ～ e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a 〓  ・ b 〓  ・ c 〓  ・ d 〓  ・ e 〓  。

a  
モウけ

④ 自然のセツ理を感じる。  
③ セツ備投資する。  
② 新聞の社セツを読む。  
① 会計をセツ半する。

b  
グ者

④ グ世観音を拝む。  
③ グ痴を言う。  
② グ象画を観る。  
① グ道の旅に出る。

c  
オオって

④ 布でツツむ。  
③ 過去をナツかしむ。  
② 行動をカエリみる。  
① 判決がクツガエる。

d  
勘ジョウ

④ ジョウ規で線を引く。  
③ ジョウ軌を逸する。  
② 苦ジョウを聞く。  
① 予算案をジョウ程する。

e  
シ数

④ 師をシ慕する。  
③ シ上最強の選手だ。  
② シ南役を務める。  
① シ難の業だ。

問二 空欄 A ) D に入る語をそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は A || 6 .

B || 7 . C || 8 . D || 9 .

- ① 居 ② 手 ③ 注 ④ 眼

問三 傍線1「ではなぜ賢治はこれほど若者に愛読されているのだろうか」の理由を筆者はどのように考えているか。理由としてふさわしくないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 10 。

- ① 賢治は宗教と科学の二本の柱を、熱い飛躍と奇体な冷静さで同居させたから。  
② 賢治は科学の発達が生態系を破壊すると直観していたから。  
③ 賢治は詩人や小説家、劇作家の中では例外的に死後も読者がふえているから。  
④ 賢治の地球論や宇宙論が、若者を納得させるのに足るものだから。

問四 傍線2「そういった宗教家たち」にふさわしくないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 11 。

- ① 宗教イデオロギーに懐疑的な者  
② 自己中心的でパワハラ的な者  
③ 宗教によって利益を得ようとする者  
④ 唯我独尊的で尊大な態度をとる者

問五

傍線3「専門」という名のタコツボに立て籠って自分の研究成果がどう悪用されようと知ったことではないと澄ましているような無責任さ」について、著者の考えとして最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 12。

- ① 狭い専門性から生じる社会性のなさ
- ② 研究者が持つべき倫理観の喪失
- ③ 研究への取り組み方の不誠実さ
- ④ 研究者が持つべき自己責任能力の回避

問六

傍線4「たがいにツノを突き合わせ足をひっぱり合って泥仕合」の意味に相当する四字熟語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 13。

- ① 自己本位
- ② 自己嫌悪
- ③ 自家薬籠
- ④ 自家撞着

問七

傍線5「涙の谷」に使われている表現技法を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 14。

- ① アナロジー
- ② パラドックス
- ③ メタファー
- ④ リリシズム

問八 傍線6（地球規模の土木工事技術）とはどういうことか。最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は 15。

- ① 自然界を生産のための物質的手段とみなすこと。
- ② 市場経済を最優先に考える物質文明を肯定すること。
- ③ 産業社会の論理によって効率化を推進していくこと。
- ④ グローバリゼーションを拡大していくこと。

問九 傍線7「人間の営みのあわれさ」を表す四字熟語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 16。

- ① 弱肉強食
- ② 生生流転
- ③ 利害得失
- ④ 諸行無常

問十 本文の内容に合致しないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 17。

- ① 生物と無生物には基本的な差異はなく、賢治の作品はそれらの親しい感情を交換し合っている。
- ② 科学者賢治は森羅万象を冷静にひとまとめにして眺め、宗教的靈感を科学的文脈で鍛えていた。
- ③ 賢治の中で宗教と科学はたえず葛藤していたが、科学お得意の分析的な見方を天啓で熱くした。
- ④ 筆者は、地球で生きる時間を余計に残している若い人たちの感性や考え方に信頼を寄せている。



問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 あの人のことを本当に書けるだろうか。あの人——私が長いこと師と呼んできたあの円位上人、西行のことを。

しばらく前から時雨が檜皮葺きの屋根を鳴らして過ぎてゆく。その幽かな音を聞いていると、そんなことはとても無理だ、あの人のことなど書けるわけではない、と誰かがつぶやいているような気がする。

たしかに私にとってあの人——わが師西行はあまりに大きな存在だった。私はどんなに努力してもあの人に達することができなかった。それに私たちが生きてきた時代は変転極まりない狂乱の日々の連続であった。すべての人々が、<sup>①</sup>洪水の荒れ狂う波間につかの間に遭遇い、つかの間に別れて、二度と遇えない宿命に翻弄されて生きていた。私はそうした日々、師西行と共にいることだけを願った。<sup>②</sup>願いつづけなければ容易に私たちの絆は絶ち切られてしまいそうな、そんな切羽詰まった気持で生きている。

私は正直言って自分がどんな人間であるか、わが師が何を考え何を感じて生きているか、じっくり思いめぐらすことはできなかった。私はただ師のそばで生きること、師の歌を **A** 書し、師のために使い走りをし、師のあとについて歩くことだけで、すでに **B** いっぱいであった。肝 **C** なことは師西行の近くにいかに生きるかだけであった。

2 それだけに 師西行に世を去られてからは、私は、師が **D** めていたひろがりのなかを、まるで無人の伽藍の内部をほつき歩くようにただ歩きまわるほかなかったのだ。私はひたすら空虚だった。雨につけ風につけ、心を締めつけるあの孤独な寂しさ、胸を鋭い鑿でえぐるように疼いたが、それ以上に、師とともに、私が生きていた生活そのものがそっくり立ち去っているのを感じた。当時私は自分を喪った虚脱者のように京の街を徘徊した。どこをどう歩き、どこで何をしていったか、何一つ覚えていなかった。日が照ろうが雨が降ろうが、そんなことは私にはどうでもよかった。ただ師の持っていたあの温み、重さをもう一度全身で味わい、それが乾飯に水が滲みるように私のなかに滲みて、心が昔のように蘇ってくるのを、身体はどこかで待ちつづけていた——もちろん私ははつきりそう気付いていたわけではないけれど、そうした渴いた願いのなかで、ひたすら生きつづけていたのは事実だった。

だが、あの桜の散りやまぬ望月の夜から一年たち二年たつうち、私は、<sup>③</sup>無人の伽藍に似たこの空白なひろがりを師西行の重さで満たす以外には、心の渴いた河床に水を流しこむことはできないのだと次第に気づくようになった。

師西行の重さ——それを私はどこから手に入れるべきだったか。

そのことに気づき、そのことを本気で考えるようになってから、私は遠縁の者から **a** ユズリうけたこの小倉山の山荘に住むことを決めた。ここは師も若い頃住みなしたことがある。その意味では西行の姿をまざまざと呼び出すには願ってもない場所に違いない。以来、私はすでに三歳みとせここで日々を暮しているのである。

私は当初ひたすら師西行の姿を、息づかいを、声の **b** 抑ヨウを、すたすた足早に歩く足音を、料紙に筆を走らせるかすかな気配を思い起し、そのなかに浸ろうとした。時には師の夢をまざまざと見て、夜明けに目覚め、かえって現実うつつの虚むなしさに涙を落すこともあった。

だが、やがてそうした物思いに耽ふけり、師が鮮かに浮び上っても、その姿は一瞬にして消え、夢のはかなさといささかも変りないことが解わかってきた。では、師西行を、変らぬ温みと重い手ごたえのなかで感じつづけるにはどうしたらいいか——私は小倉山の山荘で日夜そのことを考えつづけ、ようやく師西行のことを書く以外にないと思いついたのである。

もちろん私のなかに **④** 落葉のように積み重なった思い出の数々を書くことはできる。だが、師の姿のたしかな手ごたえを蘇らせるためには、それだけでは、ただ一面を浮び上らせるにすぎない。私の渴いた心が願っているのは、わが師の本当の手ざわり、本当の姿なのだ。それが地上に蘇らないかぎりには、 **③** 心の河床に水が流れこむことはない——私はそう思ったとき、わが師にかわりのある人々をくまなく訪ねてみたいという欲求を感じた。それはたしかに途方もない願いである。しかし私の心の襞ひだのなかに刻まれた思い出を語り、書きとめることが、師を地上に蘇らせる方途であるとしたら、同じようにして、西行の思い出を持つ人々から、それを聞き出し、書きとめるのは、師を蘇らせるさらに有効な方法ではないだろうか。師に直接じかに結びつく思い出が、最も濃くその姿をとどめているのは当然だ。だが、同時に、師が存在した場所、師が往ゆき来きした人々、師と遠くからでもかわわっていた人々について能あたうかぎり書きつくすことも、私にとって、師の姿をたしかなものにしてゆく道に見えた。ちょうど暗闇に安置された **④** 毘盧遮那仏がはじめは暗闇と変らぬ黒一色の存在であったのに、戸の隙間すきまから **⑤** 朝の光が射さしこむにつれて、徐々に荘厳な金色の御姿を気高く浮び上らせてくるのと同じである。

私が紀ノ川のほとりへ九十歳を越える乳母葛の葉めのとくす（蓮照尼）を訪ねてわが師の幼少時の物語を聞き出したのも、まだ存命だった頃、鎌倉二郎源季正すえまさ（西住上人）殿から遁世とんせい前の師の生活についてあれこれ聞き書きしたものに改めて目を通したのも、あるいはまた、待賢門院たいけんもんいんのお側そばで仕えた堀河尼の住む嵯峨野の草庵そうあんで遠い昔の思い出を語ってもらったのも、ただ師の姿のすべてを

この世に現前させ、その濃い影のなかに生きたかったからにほかならぬ。

たしかにそれらの物語はそれぞれに師の姿を映し出してはいるが、本来の生きた姿に立ち還らせるには、やはり私が自分で文書を集めて、一つの纏まりある全体の像を描きださなければならぬ。

ただ私がおそれるのは、こうした聞き書きを重ねても、師西行の姿がそこに現れることがないのではないかという一事である。というのは、いってみれば、師は多くの部屋が複雑に組み合った大きな家屋のようなもので、その一つ二つを光で照らし出しても、果してその横の部屋、裏の部屋が浮び上るかどうか、**カイ目見当**がつかないからである。

師西行はたしかに当代随一の歌びとであった。そのことを疑う人はいなからう。私が西行を師と慕ったのも、人々が私を西行の弟子と認めたのも、この歌の道があったからである。だが、西行をただ歌びと思っていると、思わぬところで師の姿を見失ってしまう。見失うというより、別の姿で立ち現れ、あらためて師の姿に驚かされることか、しばしばあるのだ。たとえば師西行は出家遁世した僧形の人であった。高野の奥に隠れたり、伊勢の海辺の草庵に暮したりした。私はそうした師のそばに住みつき、都の出仕が許すかぎり、**起キヨ**をともしにした。師の身辺には、ただ花と月の風雅しかないように思えた。しかし次の年にはすでに都にいて平家の人々と交ったり、上西門院の旧知の女房たちとの出会いを楽しんだり、遠く四国路を旅したりした。何より私を驚かせたのは、師が朝廷に出仕する私のような人間の仕事にもよく通じていたということである。

いったい朝廷の人々から師は何を知り、何を果そうとしていたのだろうか。一度、私は朝廷の用事で徳大寺実定殿の邸宅へ出かけたことがあったが、そこでばったり師西行と出遇ったのである。事の次第はいずれ然るべき折に語りたと思うが、一つだけ言っておきたいのは、師が世を逃れて花鳥風月に遊ぶといっても、その内実はもっと込み入っていて、土地争いや田租の取立てや訴状の裁定など、朝廷の評定所に持ち込まれる事件とかならずしも無縁ではなかったということだ。師西行の暮しを賄う紀ノ国の所領が、紀ノ川を挟んだ対岸の高野山領とたえず土地争いを繰り返していたことも、そうした煩いの一つに数え上げてよかったかもしれない。

あの頃はまだ頼朝殿が鎌倉で幕府を開かれる前であり、諸国の在地領主のあいだの土地争いは激しかった。むろん師はそうした土地争いにも、また紀ノ国国衙（地方行政庁）との軋轢にも直接には関知せず、一切を弟の佐藤仲清殿に**ユダ**ねていたから、わざわざ所領に立ち寄ったり、主家の徳大寺家に仲介を依頼したりすることはなかったが、このような時代の軋轢を切りはなし

ては師の姿を理解することは不可能なのである。

(辻邦生『西行花伝』より)

問一 傍線 a ～ e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a 〓 18 ・ b 〓 19 ・ c 〓 20 ・ d 〓 21 ・ e 〓 22 。

a

ユズリ

18

- ① 令ジョウを招待する。
- ② 頂くは謙ジョウ語だ。
- ③ 酵母をジョウ成する。
- ④ 貢物を献ジョウする。

b

抑ヨウ

19

- ① ヨウ頭狗肉
- ② ヨウ意周到
- ③ 枝ヨウ末節
- ④ 意気ヨウ々

c

カイ目

20

- ① カイ心の笑みを浮かべる。
- ② 契約を更カイする。
- ③ 不勉強を後カイする。
- ④ 三年間カイ勤だった。

d

起キヨ

21

- ① ご隠キヨさんを訪ねる。
- ② 監督のキヨ就が注目される。
- ③ キヨ点を搜索する。
- ④ 容疑者を検キヨする。

e

ユダねて

22

- ① 提案にイ存はない。
- ② イ員長に選ばれる。
- ③ イ儀を正して出席する。
- ④ イ匠を凝らして作る。

問二 空欄 A へ D に入る語をそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は A へ 23。

B へ 24 ・ C へ 25 ・ D へ 26。

- ① 心 ② 浄 ③ 精 ④ 占

問三 傍線1「あの人」とはどういう人か。最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 27。

- ① 小倉百人一首の選者  
② 蓮照尼の息子  
③ 徳大寺実定の息子  
④ 佐藤仲清の兄

問四 傍線2「師西行に世を去られて」について、師西行が世を去った季節はいつか。最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 28。

- ① 春 ② 夏 ③ 秋 ④ 冬

問五 傍線3「心の河床に水が流れこむことはない」は、「心」がどのような状態であることを示しているか。本文中の傍線①へ④を参考にして、最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 29。

- ① 洪水の波間に出遇い宿命に翻弄された状態  
② 絆が絶ち切られそうな切羽詰まった気持ち  
③ 無人の伽藍に似た空白なひろがり  
④ 落ち葉のように積み重なった思い出

問六 傍線4「毘盧遮那仏」、傍線5「朝の光」に相当するものをそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は、傍

線部4 30・傍線部5 31。

① 私

② 西行

③ 西行の思い出を持つ人々のことば

④ 私の心の褓のなかに刻まれた思い出

問七

傍線6「師は多くの部屋が複雑に組み合った大きな家屋のようなもの」に当てはまらないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 32。

① 当代随一の歌びとで、花鳥風月の風雅を朝廷で遊んだ。

② 出家遁世した僧形の人で、旅人でもあった。

③ 都で平家の一つと交わり、旧知の女房たちとの出会いを楽しんだ。

④ 土地争いに直接には関知しなかったが、無縁ではなかった。

問八

本文の内容に合致するものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 33。

① 師西行には多面性があり、交遊関係も多岐にわたり、朝廷に出仕した役人としての「私」と出会った。

② 師西行と「私」がともに生きた時代は戦乱が続く激動の時代であったので、師は僧形に姿を変えて、隠棲していた。

③ 師西行の重さを再び手に入れるため、生きていた時の姿をできるだけ忠実に思い起こして書き留めた。

④ 「私」は師西行とともに生きているだけで満たされていたが、師を失った後に強烈な喪失感に襲われた。

《以下余白》